

## 「隣人を自分のように愛しなさい」

「律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。』」（マタイによる福音書 22:35-36）

イエスは「『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ。」（マタイによる福音書 22:37-40）と答えられました。

「あなたの神である主を愛すること」は、がんばれそうな気がします。他に神を持たないこと、みだりに神の名を唱えないこと、etc. 十戒が教える神との関係を一所懸命に邁進することで、神を愛することが全うされるからです。その意味で、神との関係は「これをすれば大丈夫」「これをしたらダメ」という基準が（比較的）わかりやすいと言えるかもしれません。

一方、「隣人を自分のように愛すること」はどうでしょうか。これもがんばりたいとは思いますが、しかし、人間同士の関係は基準がわかりにくいのもまた事実です。もちろん、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」（マタイによる福音書 7:12）とイエスが言われたことは知っています。だから、その通りに実行したい。そう願いながら、それがなかなか難しいのが現実です。

例えば、「赦されたいから赦す」として、どこまで赦せば良いのでしょうか。

旧約聖書に登場するヨセフは実の兄たちから疎まれ、最終的にはエジプトに売り飛ばされてしまいました。彼らのことを恨んでも当然とも思えます。ところが、成長してエジプトの大臣になっていたヨセフは、兄たちが飢えて食べ物求めて目の前に現れた時、「しかし今は、私をここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのです」（創世記 45:5）と彼らを赦すのです。

また、新約聖書では、弟子のペトロが「主よ、きょうだいが私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」（マタイによる福音書 18:21）と問うた時、イエスは「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍まで赦しなさい」（マタイによる福音書 18:22）と答えています。ペトロからすれば、七回も赦せば十分だろうと思っていたところ、イエスは「全部赦しなさい」と答えられたということ（七は完全数だから、七の七十倍は全てを指す）です。生命の危機を迎えても赦すのであり、何度繰り返されても赦す、これが聖書の言う「赦し」なのです。

「もしあなたがたが、聖書に従って、『隣人を自分のように愛しなさい』という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです」（ヤコブの手紙 2:8）と手紙が問う時、それは「神と向き合うだけでなく、隣人とも向き合っているか」を問うています。もし人を分け隔てして、「自分さえ良ければ」に陥っているとすれば、イエスの二つの戒めをきちんと実行できていないことになります。

自分は赦されても、相手を赦さないままでいるならば、やはりそれはイエスの思いに反していることになるでしょう。「自由の律法によっていづれは裁かれる者として、語り、また振る舞いなさい」（ヤコブの手紙 2:12）と命じられているのは、神の前に謙虚に、常に自分の立ち居振舞を振り返りなさいという意味なのです。詩人は「全き道を歩み、義を行い／心の中で真実を語る者。舌で人を傷つけず／友に災いをもたらさず／隣人をそしることもない」（詩編 15:2-3）者が、神の心に適う者であると歌います。「赦し」ひとつとっても完全に実行できない私たちではあるけれど、それでもなお私たちのことを愛してくださる神に感謝して、「赦したい」と願うことから始めましょう。なぜなら、それが「隣人を自分のように愛しなさい」との戒めに応える第一歩だからです。

